研　究　報　告

１　研究主題

主体的によりよく生きようとする力を育む道徳教育
～ふるさとを基盤とし，道徳科の趣旨を踏まえた指導と評価の工夫を通して～

２　主題設定の理由

（１）主題設定の背景

平成 27 年３月中学校学習指導要領の一部改正があり，道徳の時間は教育課程上「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」という。）として新たに位置付けられた。平成 29 年３月に公示された新中学校学習指導要領では,「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を重視し，新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実が示された。また,「どのように学ぶか」については,「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善が必要であるとされ，道徳科においても発達の段階に応じ，答えが１つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え，向き合う「考える道徳」「議論する道徳」への転換が求められている。

広島県では,「広島版『学びの変革』アクションプラン」が策定され，学習者基点の能動的な深い学びを目指した「主体的な学び」を全国に先駆けて実施している。道徳の授業においても同様であり，世羅町では，道徳教育推進協議会を中心に学習者基点の能動的な深い学びを目指して道徳の時間の授業研究に力を注いでいる。

本校は，大妻女子大学創設者で世羅町名誉町民である大妻コタカ女史の「愛郷崇祖」の考え方を大切にしながら，ふるさとを基盤とした教育活動を推進し，これまで地域と共にある道徳教育を脈々と紡いできた。平成 18・19 年度には，文部科学省「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」地域センター校の指定を受け，道徳の時間の多様な資料開発とその効果的な活用についての研究を進めた。また，平成 24 年度には，広島県教育委員会「心の元気を育てる地域推進事業」推進地域の指定を受け，小・中学校，家庭，地域社会が互いにつながりあって子どもを育てるため「甲山地域推進協議会」を設置して，児童生徒の自主性や主体性を育む体験活動を中心とした教育活動を展開した。この教育活動は現在も生徒とふるさとをつなぐ大切な役割を担っている。

（２）研究仮説

平成 29 年度２月に校内で実施した生徒質問紙調査において,「自分にはよいところがあると思う」「授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしている」の項目が県平均を下回った。この結果を受け，本校の課題を,「生徒の自己肯定感が低い」,「生徒の意見を引き出し互いの良さや違いを認め合う授業づくりが不十分であった」の２点に整理した。

前述の新学習指導要領の方向性，本校のふるさとを基盤とした教育活動，生徒実態を踏まえ，今大会の研究主題を「主体的によりよく生きようとする力を育む道徳教育～ふるさとを基盤とし，道徳科の趣旨をふまえた指導と評価の工夫を通して～」と設定した。ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の時間との関連を強化するとともに，道徳の授業における指導と評価の工夫を充実させることにより，生徒の自己肯定感を高め，ふるさと世羅に愛着と誇りを持ち，主体的によりよく生きようとする生徒を育成することができるであろうと仮説を立て，研究を進めていくこととした。

３　学校概要・課題の分析

（１）学校概要

平成 30 年度の生徒数は,【表１】の通りである。本校は甲山小学校とせらひがし小学校の２校の卒業生から成り，全生徒数は 126 名の６学級編制である。

【表１】生徒数・学級数　　　　　　（平成 30 年５月現在）

	男子	女子	合計	学級数
第１学年	21	25	46	2
第２学年	22	15	37	1
第３学年	21	18	39	1
肢体不自由特別支援学級	1	0	1	1
自閉症・情緒障害特別支援学級	2	1	3	1

学校教育目標は「郷土を愛し，心豊かで自ら進んで学び，何事にも粘り強く取り組む生徒の育成」であり，生徒に育成すべき資質・能力を「主体性」「表現力」「(自らへの）自信」の３つに設定している。

学校の教育活動全体を通して，生徒・教職員一同，ふるさとを大切にしながら,「一生懸命はかっこよく，美しい」を合言葉に，様々な行事や学校生活に取り組んでいる。

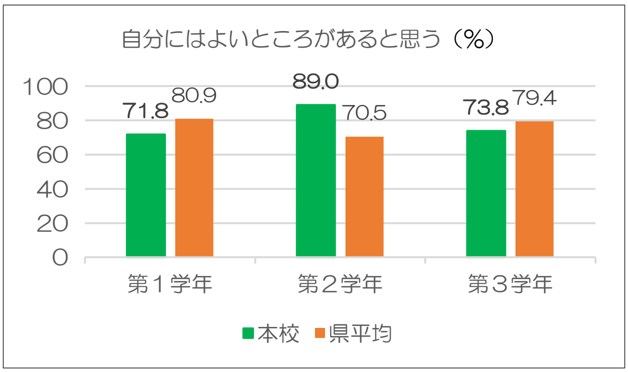
（２）課題の分析

ここでは前述の道徳に係る生徒質問紙から明らかになった２点の課題について分析をする。

【課題①】生徒の自己肯定感が低い

平成 29 年度に実施した生徒質問紙調査の結果では,「自分にはよいところがあると思う」(自己肯定感）と肯定的に回答した第１学年と第３学年の生徒の割合が，平成 29 年度に広島県で実施された「道徳教育改善・充実」総合対策事業に係る児童生徒等の意識調査（中学校）参加校の県平均を下回った。(図１)

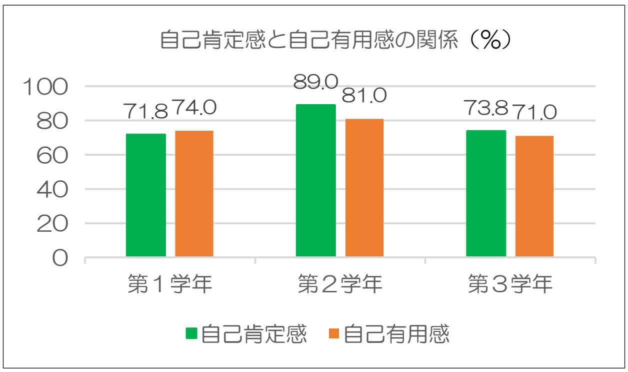
【図１】生徒質問紙調査結果と県平均との比較



このことから本校生徒は自己肯定感が低いことに課題があるといえる。

また,「自分のよさが，まわりの人からみとめられていると思う」（自己有用感）と肯定的に回答した生徒の割合も，各学年ともに自己肯定感とほぼ同様の数値を示しており，自己肯定感と自己有用感が密接に関係していることが分かる。（図２）

【図２】自己肯定感と自己有用感の関係



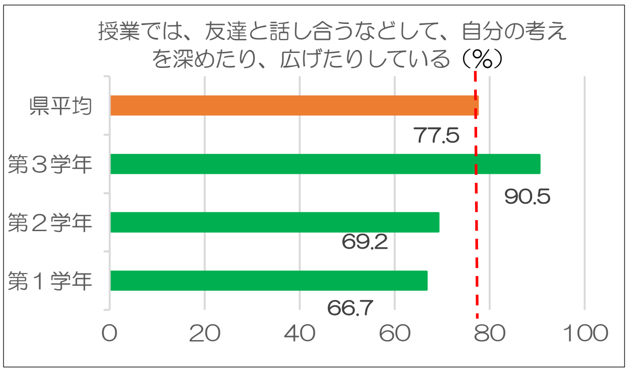
本校では，【課題①】の背景として，生徒が他者から認められたり，ほめられたりする体験が不十分であったのではないかと分析した。本校が実践している，ふるさとを基盤とした教育活動を見直し，工夫・改善することが課題の克服につながると考えた。

【課題②】生徒の意見を引き出し互いの良さや違いを認め合う授業づくりが不十分

平成 29 年度に校内で行った生徒質問紙調査の結果では，「授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしている」と肯定的に回答した第１学年と第２学年の生徒の

割合が，平成 29 年度広島県「基礎・基本」学力定着状況調査の県平均を大きく下回った。（図３）

【図３】生徒質問紙調査結果と県平均との比較



一方，平成 29 年度に行った本校教職員アンケート調査では，「『道徳の授業』では，児童生徒が友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりするような指導の工夫をしている。」と肯定的に回答した教職員の割合が 80.0％であった。このことから，授業者の授業づくりと生徒のとらえに大きなギャップがあることがわかる。本校では【課題②】の背景として，とりわけ道徳の時間における協働的な学習活動が，ワークシートの記述を読み合うだけの活動にとどまるっている実態があると分析した。学校組織をあげて授業改善に取り組み，課題の克服を図ることが必要であると考えた。

４　課題解決に向けて

以上の分析をふまえて，課題解決に向けた方向性を次の２点に整理した。

①ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の授業を関連させ，郷土を愛し，主体的によりよく生きようとする態度を育てる。

本校の特色として，ふるさとを基盤とした教育活動が挙げられる。『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科　道徳編』では，「生徒は，郷土によって育まれてきた伝統と文化に触れ，体験することを通して，そのよさに気づき，郷土に対する誇りや愛着をもつとともに，郷土に対して主体的に関わろうとする心や態度も育まれる。」と示されている。課題の解決に向けて，本校の特色を生かしながら，自己肯定感や自己有用感の向上を図り，主体的によりよく生きようとする態度を育成する。

道徳の時間においては，地域の先輩方や歴史に触れ，郷土を愛する気持ちや，先輩方の生き方から自身の生き方を見つめ，よりよく生きようとするための道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。そして，カリキュラム・マネジメントにより，道徳の時間と総合的な学習の時間を中心とする教科・領域との関連を強化することを通して，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，人間としての生き方についての考えを深めることができるようにする。また，小・中学校・地域で行う「花いっぱい運動・クリーン大作戦」や小中連携における「あいさつ運動」などの教育活動との密接な関連を図り，生徒に自信や達成感を持たせ，自己肯定感や自己有用感を向上させる。

②道徳の時間における指導と評価の工夫を行い，生徒の意見を引き出し，互いの良さを認め合う授業づくりを行う。

道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため,『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）』における「第３章　特別の教科　道徳」の「第１　目標」では「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，人間としての生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。」と示されている。

生徒の意見を引き出し，互いの良さを認め合う授業をつくるためには，教師と生徒との信頼関係や生徒相互の温かい人間関係が基盤となると考える。課題の解決に向けては，まず，生徒一人一人が伸び伸びと自分の考え方や感じ方を表現できる学級経営を行うことを前提とする。

また，生徒の意見を引き出し，生徒相互の心の

交流を図るには，教職員一人一人の授業改善が不可欠である。課題の改善に向けて次の点に重点的に取り組む。

○ かかわり合う場の指導の充実
○ 自己を見つめ，多面的・多角的に考えさせる授業づくり

さらに，校内研修を充実させ，教職員が生徒一人一人の人間的な成長を見取り，生徒自身の自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価できるようにしていく。道徳の時間における生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握する工夫を行い，日々の指導や生徒個々へのフィードバックに生かすなど，学校全体で互いの良さを認め合う風土をつくる。

５　研究実践

本校では，道徳の実践に係る研究を進めるために次の４部会を位置付けた。各部会において具体的な研究を行い，校内への協議・提案を行っている。（表２）

【表２　校内組織】

推進委員会	校長・教頭・教務主任・研究主任・道徳教育推進教師による運営組織
授業づくり部会	学習指導案・授業モデル・指導方法の研究など
評価研究部会	ワークシート，評価に係る研究・提案
ふるさと学習部会	地域教材の編集・開発，掲示物の研究

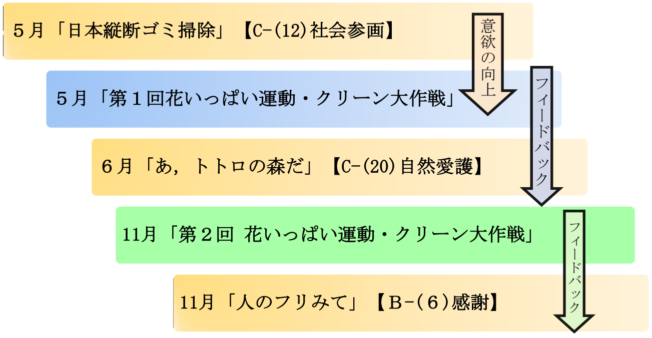
（１）ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の時間との関連の強化

①カリキュラム・マネジメントによる道徳教育の充実

道徳教育の全体計画・道徳の時間の年間指導計画の作成にあたり，ふるさとを基盤とした教育活動と道徳との関連を整理した。（図４）

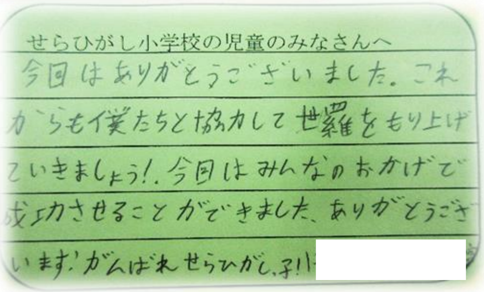
【図４　ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の時間との関連】

第１学年の例



「花いっぱい運動・クリーン大作戦」とは，中学生が各居住地区に分かれて，年２回，地区の小学生，保護者，地域の人々と共に清掃活動と花植え活動を行うものである。この体験活動では，中学生がリーダーシップを発揮し，地域や保護者，小学生など幅広い年齢の人々と協働的に活動することから，活動の前後に「自主，自律」や「思いやり，感謝」「自然愛護」「社会参画」「郷土を愛する態度」の内容項目について道徳の時間で学習し，関連を図った。

また，活動後には自己肯定感・自己有用感・郷土を大切にする気持ちの高まりをねらい，小・中学校の児童生徒で互いの良さや頑張っている姿を認め合うメッセージの交換を行い，地域の方々へは感謝のメッセージを届けた。小学生や保護者，地域の方々から届いた声やメッセージは，学級，全校朝会，学校だより，廊下の掲示物など様々な場所や方法を通して生徒に積極的に伝えた。



②地域教材の活用

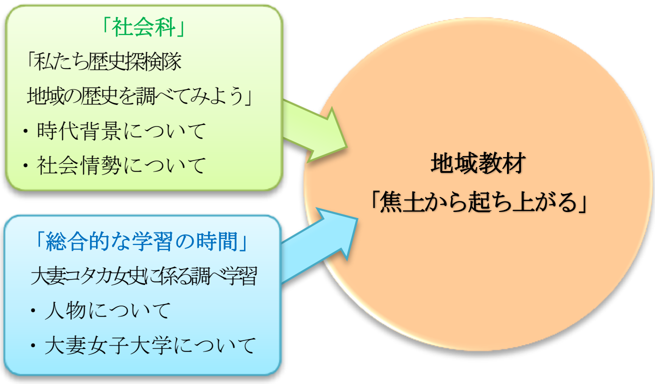
また，各学年において道徳の時間で扱う地域

教材と教育活動との関連を図った。

第１学年では，道徳の授業で地域教材「水没した駅」を行い，校区内の歴史や地域を大切にする人々の思いについて深く考えさせ，その後の総合的な学習の時間で行う「我がふるさと世羅町の福祉」につながるように工夫した。また，世羅町の高齢化や過疎化の実態について自分ごととして学習し，課題に対し主体的に向き合うことのできるようにした。

第２学年では，地域教材「焦土から起ち上がる」を行い，大妻コタカ女史の人生を通して，目標の実現に向けて粘り強く生きる素晴らしさについて深く考えさせ，その後の修学旅行における大妻女子大学への訪問学習につながるように工夫した。また，地域教材を扱う前には，社会科で当時の時代背景や社会情勢についての学習，総合的な学習の時間において大妻コタカ女史についての調べ学習を行った。（図５）

【図５ 第２学年の例】

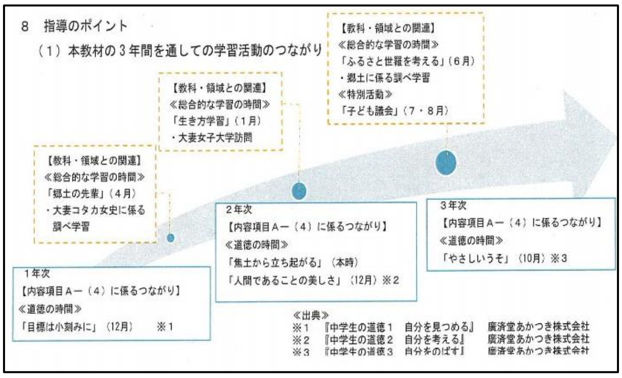


第３学年では，地域教材「故郷（ふるさと）」を行い，中国電力陸上部・坂口泰総監督のふるさとに対する感謝の気持ちと，ふるさとに恩返しをしたいという熱い思いに触れることを通して，郷土に感謝し，大切にしていこうとする道徳的実践意欲の向上を図った。また，２学期に行われる中学校生活最後の体育大会や文化発表会につなげて，「地域の方々にも感謝の気持ちを届けたい」という思いを持って，これらの行事に取り組むことができるように工夫した。

③内容項目と３年間の学習を体系的に見通すことができる学習指導案

さらに，学習指導案の形式の見直し・工夫を図り，本校の特色を生かすことができるようにした。（図６）学習指導案作成の際に，ねらいとする内容項目が，３年間を通してどこでどのように育まれていくかを体系的に捉えることができるように工夫している。

【図６ 学習指導案の工夫】



（２）道徳の時間における指導と評価の工夫

①生徒の意見を引き出し，互いの良さを認め合う授業づくり

ア　かかわり合う場の指導の充実

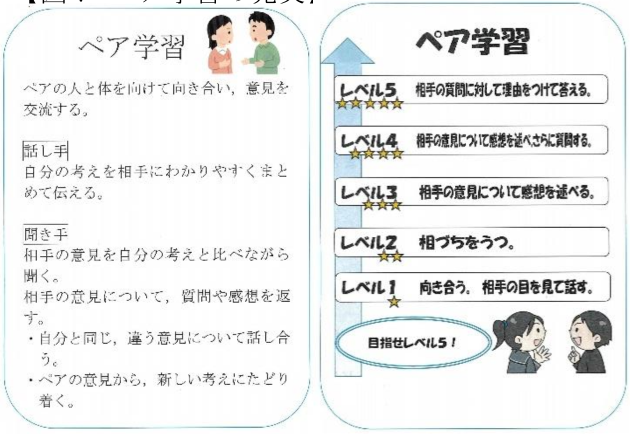
本校では，全ての教科・領域の授業において，協働的な学習の場として，かかわり合う場を設けている。道徳の授業においても，かかわり合う場を授業の山場に位置付け，他者の意見や考えから学び，自分の考えを深めさせることに取り組んできた。しかし，かかわり合う場がワークシートの記述を読み合うだけの活動にとどまる実態があった。そこで本年度はより充実したかかわり合う場を持つことができるよう，次のような工夫をした。

≪ペア学習の充実　～目指せレベル５～≫

年度初めに，ペア学習の在り方を見直し，どの教科においてもペア学習が充実するように研修を行った。生徒には，ポスター掲示し，授業者・生徒がペア学習のイメージを共有できるようレベルごとに具体的な姿を示して意識づけを行った。（図７）道徳の時間においても，ペア学習を意図的に取り入れ，かかわり合う場の充実を図っている。授業者は，ポスターを活用し，

学　級全体や個人に対して，相手の意見を自分の考えと比べさせたり，相手の意見について質問や感想を述べさせたり，理由を明確にして自分の意見を伝えさせたりと，具体的な支援を行い，活動の充実を図っている。

【図７ ペア学習の充実】



イ　自己を見つめ，多面的・多角的に考えさせる授業づくり

≪合言葉は『こ・う・ざ・ん』≫

『こ・う・ざ・ん』とは，学校全体で取り組んでいるかかわり合う場の充実に向けた教職員間の合言葉である。（図８）４つのポイントを授業展開に位置付けることで，ねらいとする道徳的価値について生徒に多面的・多角的に，そして自分ごととして考えさせることができるように工夫している。

【図８ 『こ・う・ざ・ん』授業づくりの具体例】

ⓒじん（個人）で考えを持つ	中心発問に対して最初に個人で思考させる場を確保することで，一人一人の考えをしっかりと持たせる。
りゆ(う)（理由）を整理して伝える	大妻コタカ女史の困難に屈することなく立ち向かった学校再建への熱意の理由を整理して伝えさせる。
さま(ざ)ま（様々）な角度から考える	ペア学習や全体交流で出た意見に対し，考えの理由を問い返すことで，意見の違いを明確にして，多面的・多角的に道徳的価値をとらえさせる。
じぶ(ん)（自分）ごととして考える	終末で，学習課題について自分の考えをまとめさせることで，道徳的価値について自己の考えを深めさせる。

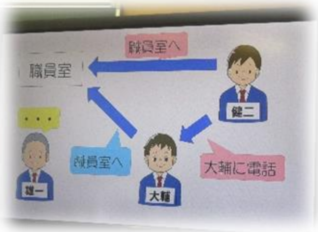
≪シミュレーション授業≫

研究授業毎に教職員が生徒役を務め，シミュレーション授業を行っている。授業後には，かかわり合う場の充実，ねらいに迫る発問の工夫や多面的・多角的に考えさせる授業づくりに向けた意見を出し合う。このように，シミュレーション授業で実践することを通して，更なる分析，授業改善へとつなげている。

≪指導方法の工夫・検証≫

また，校内研修においては，積極的に指導方法の工夫を試み，その検証を行った。

ＩＣＴの活用による読み物資料の提示（図９・図 10），ジグソー活動を用いた問題解決型学習（図 11），意志表示カップの活用による授業（図 12）など，様々な指導方法により生徒から意見を引き出し，互いの考えを認め合う授業を実践した。



左上【図９】，右上【図 10】，左下【図 11】，右下【図 12】

②評価

~道徳の時間における生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握する工夫~

これまで本校では，授業評価・授業改善につなげる目的で「評価の観点」を学習指導案に位置付けて研究を進めてきた。

具体的には，研究授業後の協議において，生徒の記述や発言内容を基に，発問等を通して本時のねらいに迫ることができたかを検証・評価し，改善案を協議し，授業改善につなげてきた。

ア　評価に係る研究の経緯

≪生徒の見取りに係る当初の研究≫

本校では，前述の「評価の観点」とは別に生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握する方法を工夫する必要があると考えた。

道徳科の趣旨を踏まえた見取りを行うため，校内では「どのようにすればよりよく生徒の学習状況や道徳性の成長の様子を把握することができるか」が議論となった。

本校では，当初次のような形式で生徒を見取ろうとした。（表３）

【表３】当初に試案した生徒の見取り

	生徒の姿
わかる	資料を読んで，道徳的価値を認識し，その大切さを理解している
つなぐ	理解した道徳的価値を自分自身や他者，社会や自然につなげて考えている
生かす	理解し，考えた学びを踏まえた行動をしようとしている，実際に行動できる

研究授業の後，ワークシートの記述を基に生徒の姿を見取る研修を行ったところ，他者との比較になってしまうのではないか，生徒個々の発達段階に応じて見取ることが困難ではないかという意見が出た。そこで，励ます個人内評価につなげるための見取り方について研究と議論を重ねた。

≪「評価の視点」の導入≫

本校では，兵庫教育大学教授谷田増幸先生を講師として招聘し，理論研修を進めてきた。また，世羅町道徳教育推進協議会との連携を図り，これまで評価に係る演習等も行ってきた。

これらの研修から本校では，「評価の観点」に加えて道徳科の趣旨を踏まえた評価の工夫として，「評価の視点」を学習指導案に位置付けることとした。

「評価の視点」については，次の２点に焦点化して生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に見取る工夫を行うこととした。（表４）

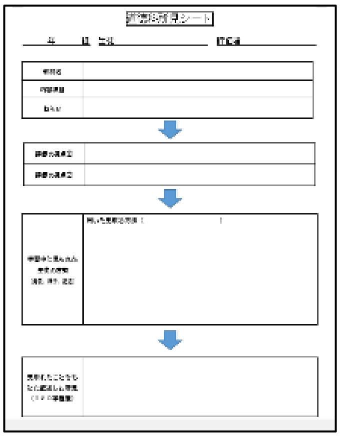
【表４　評価の視点】

視点１	多面的・多角的な見方へと発展しているか。
視点２	道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。

また，本校では，他の生徒との比較による評価ではなく，年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め，励ます個人内評価として生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を記述し，その評価の妥当性や信頼性を担保するための研修も行っている。

評価の妥当性や信頼性を担保するための研修にあたっては，道徳所見シート（図 13）を活用している。生徒のワークシートの記述を根拠にした見取りを行い，教職員同士で記述内容とその根拠を交流し，一人一人の成長をよりよく見取ることができるよう工夫している。

【図 13 道徳所見シート】



イ　継続的に生徒を見取る方法の工夫

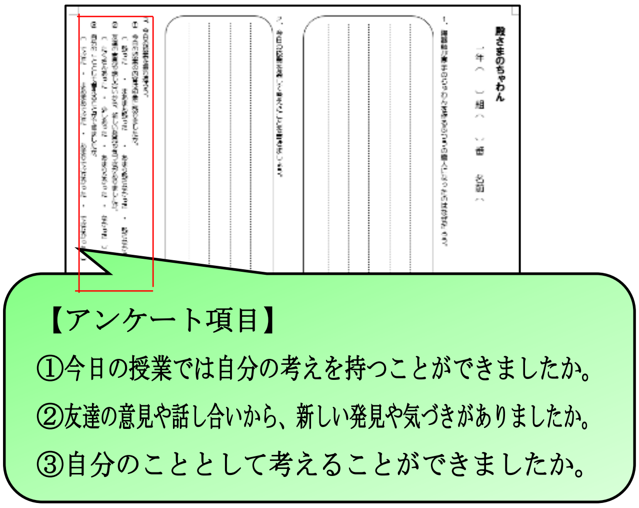
生徒一人一人の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り，励ます個人内評価につなげるために授業で工夫していることは，次の通りである。

≪ワークシートの工夫≫

本校では，学校で統一した書式のワークシートを作成している。（図 14）記述は中心発問に係る部分と，ふりかえりとして終末に書く部分のみの構成にしている。前述の２つの評価の視点が生徒の記述に表れるよう，記述する時間とスペースを確保するためである。また，ワーク

シートの左端には，アンケート記入欄を設けている。これは，アンケート結果を授業者が授業改善に生かすと同時に，「書くこと」や「表現すること」が困難な生徒を見取るための工夫である。発問やふりかえりの欄が空白であっても，授業者は，このアンケートに記された内容を基に，授業後口頭で授業について話をしたり，面談を持ったりして，生徒の状況を把握している。

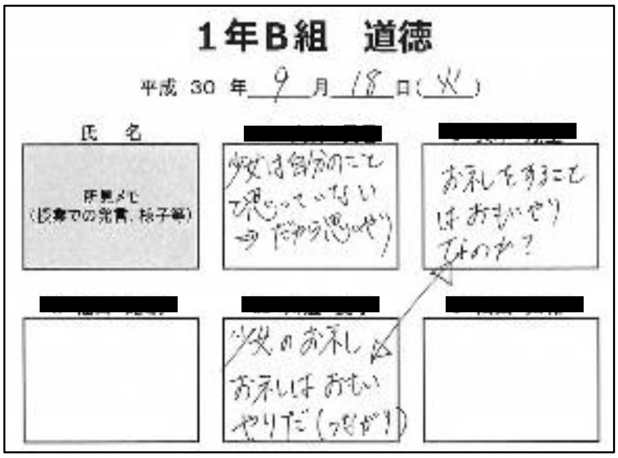
【図 14 ワークシート】



≪評価支援シートの活用≫

また，本校では，毎回の道徳の授業で評価支援シートを活用し，生徒の意見を授業に生かすとともに記録に残し，授業ごとに生徒の学習の様子や道徳性に係る成長を見取っている。（図 15）

【図 15　評価支援シート】



６　成果と課題

（１）課題解決の方向性①に係る成果と課題

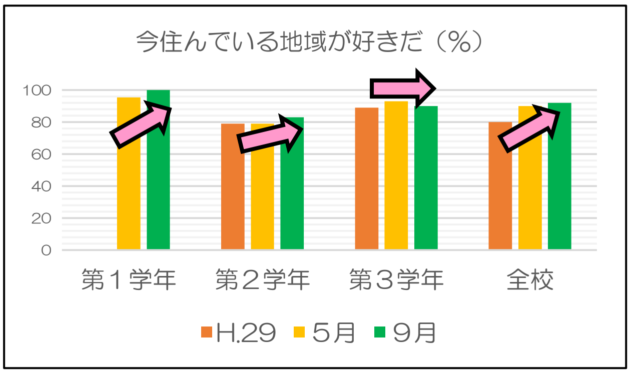
課題解決の方向性①

ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の授業を関連させ，郷土を愛し，主体的によりよく生きようとする態度を育てる。

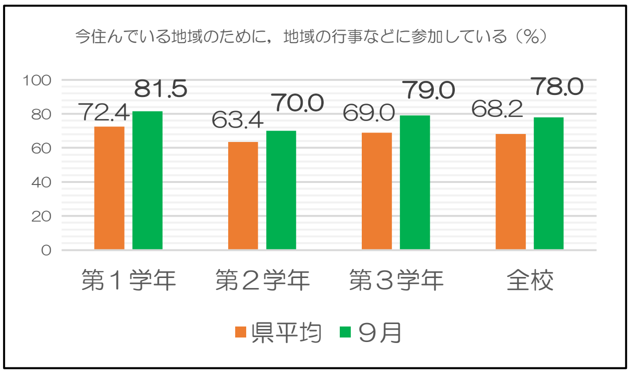
【成果①】ふるさとで主体的によりよく生きようとする道徳的心情・実践意欲・態度の向上

ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の授業を意図的に関連させた取組を展開させたことで，ふるさとに対する愛情が深まり，「地域のために地域の行事などに参加している」と肯定的に回答した生徒の割合も県平均を上回った。（図 16，図 17）

【図 16】地域社会に係る生徒質問紙調査結果①



【図 17】地域社会に係る生徒質問紙調査結果②



≪分析≫

課題解決の方向性①に基づく取組を通して，ふるさとで主体的によりよく生きようとする道徳的心情・実践意欲・態度を向上させることができていると考える。特に道徳の時間における地域教材と総合的な学習の時間を中心とした教科・領域における学習を通して，ふるさとに対する愛情を深

め，「ふるさとで活躍・貢献したい」と考え実践する生徒が増えてきていると考えている。このことは，地域の方々に協力していただいたアンケートの結果からも分かる。（表５）

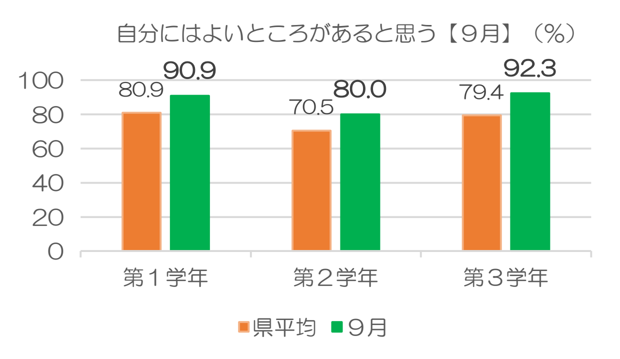
【表５】地域におけるアンケート結果

内　　容	肯定的評価の割合
地域の子どもは，自分のよいところを自覚していると思う	98.4%
地域の子どものよさは，まわりの人から認められていると思う	100.0%
地域の子どもは，人の気持ちを考えていると思う	98.4%
地域の子どもは，人が困っているときは，進んで助けていると思う	100.0%
地域の子どもは，自分が暮らす地域のことをもっと知ろうとしていると思う	93.7%
地域の子どもは，今住んでいる地域の行事に進んで参加し，役割を担っていると思う	96.8%
地域の子どもは，あいさつをしっかりしていると思う	92.2%

【成果②】自己肯定感・自己有用感の高まり

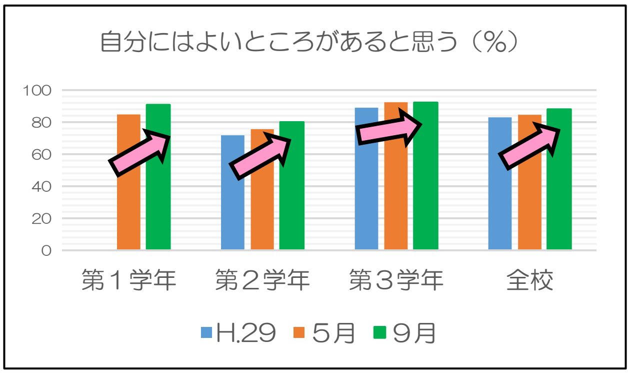
本研究は，本校生徒の課題である「自己肯定感」を高めることを意図したものである。研究の成果を検証するため，平成 30 年度９月に実施した生徒質問紙調査の結果では，全学年において「自分にはよいところがあると思う」（自己肯定感）と肯定的に回答した生徒の割合が高まり，県平均を上回った。（図 18）

【図 18】生徒質問紙調査結果と県平均との比較



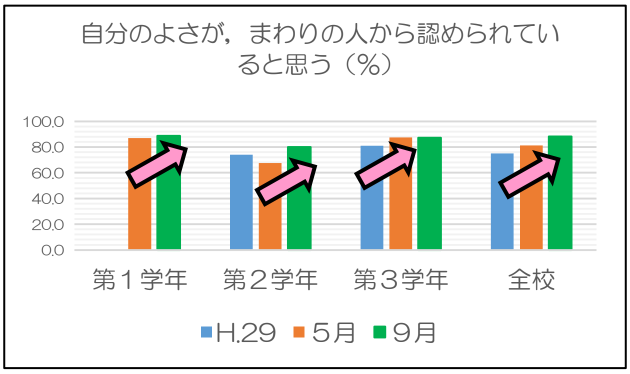
また，どの学年も徐々に自己肯定感が高まってきていることが分かる。（図 19）

【図 19】自己肯定感の変容（学年別）



また，同様に「自分のよさが，まわりの人から認められていると思う」（自己有用感）と肯定的に回答した生徒の割合にも高まりが見られた。

【図 20】自己有用感の変容（学年別）



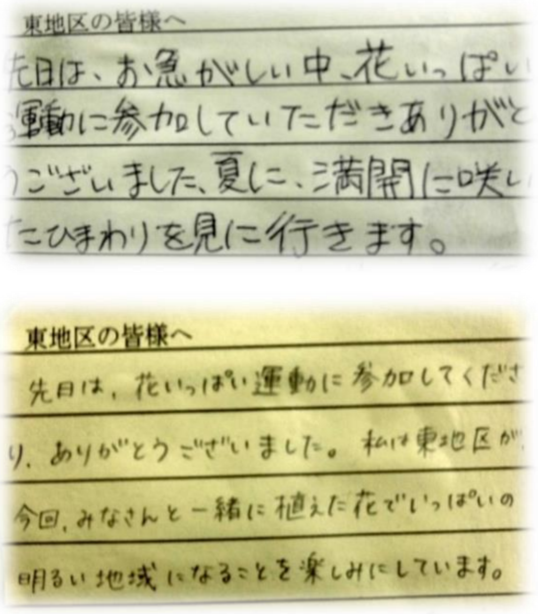
≪分析≫

道徳の時間と総合的な学習の時間を中心とする教科・領域との関連を強化することで，前年度に比べ総合的な学習の時間・道徳の時間・行事の事後など多くの場面で生徒に肯定的な声かけや評価をすることができた。また，体験活動や行事の事前・事後における道徳の時間を充実させることを通して，生徒一人一人が自己の良さや頑張りを見つめ，自信や達成感を持てるようになったことが変容につながったと考える。

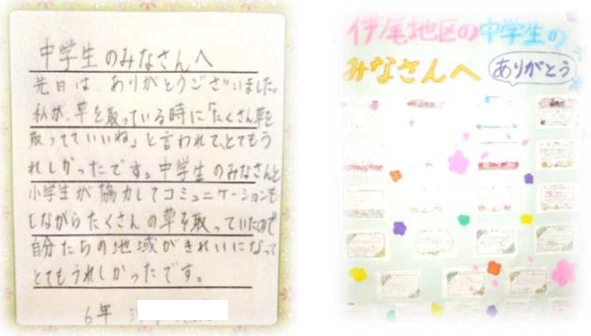
また，自己有用感を高めるために様々な取組を行ってきたが，生徒が地域社会から認められ，必要とされていると実感できたことが前述の変容につながった要因であると考える。小学校・地域社会と行った交流でいただいたメッセージは，生徒たちにとって大きな励みとなり，自己有用感の向

上につながったと考える。（図 21，図 22）

【図 21】小学校・地域社会へ送ったメッセージ



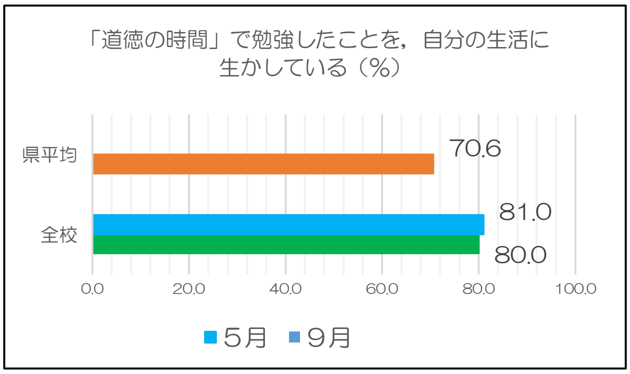
【図 22】小学校から届いたメッセージ



【課題】「生かす」場面をより充分させること

前述の成果から，カリキュラム・マネジメントによって，ふるさとを基盤とした教育活動と道徳の授業を有機的に関連させたことにより，郷土を愛し，主体的によりよく生きようとする態度を育てることができていると考える。今後に向けた課題としては，この関連の有効性をしっかりと検証・分析し，来年度に向けてさらなる改善を図っていくことである。特にカリキュラム・マネジメントに係る改善点として，「道徳の時間で育んだ道徳的判断力・心情・実践意欲と態度を生かす場面を意図的につくること」が挙げられる。『「道徳の時間」で勉強したことを，自分の生活に生かしている』と肯定的に回答した生徒の割合に着目すると，９月の時点で大きな変化が見られなかった。（図 23）

【図 23】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果⑤



ふるさとに係る「生かす場面」は体験活動等多くの場面を意図的に設定することができていたと考えるが，今後は，カリキュラム・マネジメントの視点に立ち，その他の学習でも「生かす場面」を意図的に増やしていきたい。

（２）課題解決の方向性②に係る成果と課題

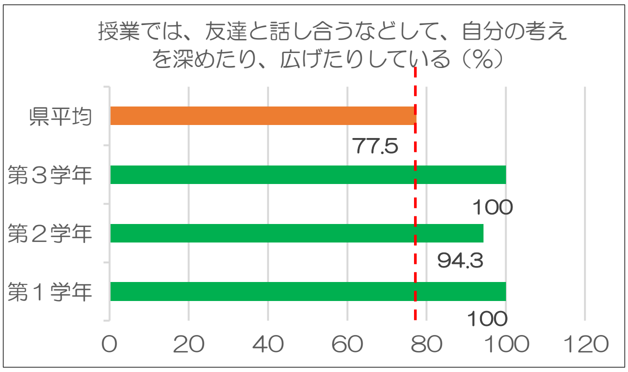
課題解決の方向性②

道徳の時間における指導と評価の工夫を行い，生徒の意見を引き出し，互いの良さを認め合う授業づくりを行う。

【成果①】生徒の意見を引き出し，互いの良さを認め合う授業づくりの充実

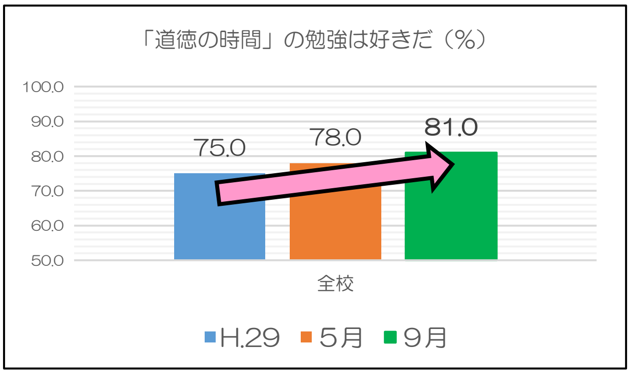
９月に行った生徒質問紙調査では「授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしている」と肯定的に回答した生徒の割合が高まり，平成 29 年度広島県「基礎・基本」学力定着状況調査の県平均を上回った。（図 24）

【図 24】生徒質問紙調査結果と県平均との比較

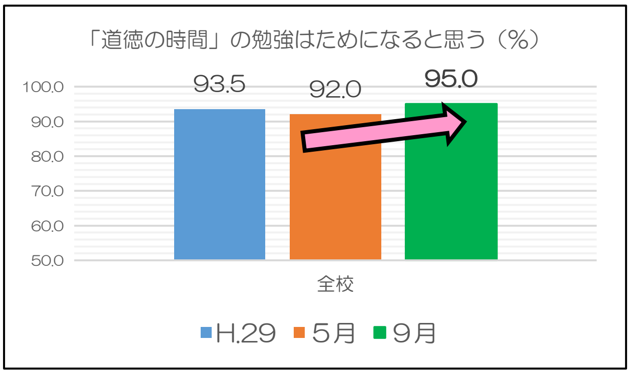


また，道徳の時間に係る質問項目にも肯定的な変容が見られ，授業改善によって道徳の時間が充実してきていることがうかがえる。(図 25，図 26，図 27)

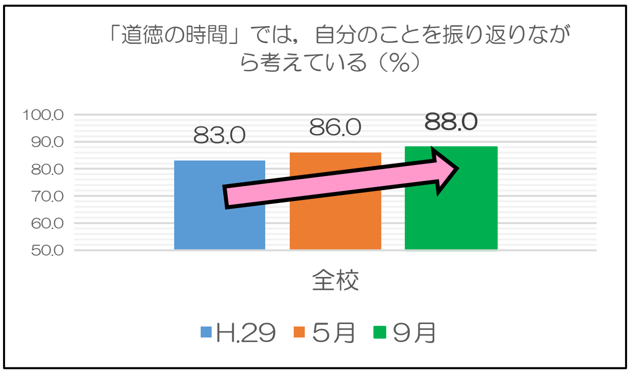
【図 25】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果①



【図 26】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果②



【図 27】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果③



≪分析≫

自己を見つめ多面的・多角的に考えさせる授業づくり・かかわり合う場の指導の充実・生徒の学習状況や成長の様子を継続的に見取る方法の工夫などにより，道徳の時間の授業改善が少しずつ進んでいると考える。前述の「評価の観点」と「評価の視点」を通して授業づくり・授業改善を進めること，「こ・う・ざ・ん」を合言葉に指導方法を工夫することで，かかわり合う場の充実，ねらいに迫る授業展開の実践につながっている。

また，これまでに挙げた成果は，相互に作用し合い，よい循環を生み出していると考える。

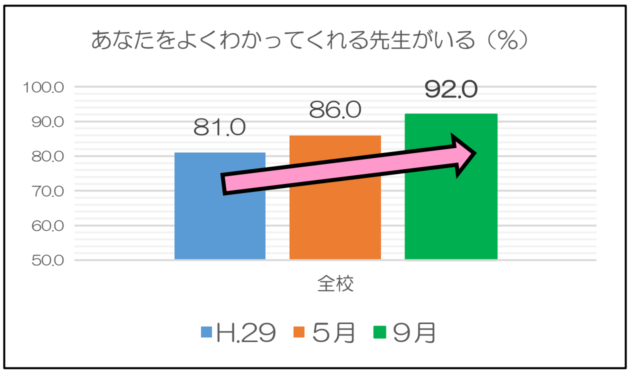
【成果②】評価の実施による生徒理解の進展

本研究では，道徳科の趣旨を踏まえて，指導のみならず評価の工夫を行った。

前述の通り，生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握するため，評価の視点を２つに定め，ワークシートや見取りのためのツールを工夫し，励ます個人内評価の試行に取り組んだ。

評価を信頼性と妥当性を担保したものにするため慎重にきめ細かくワークシートの記述を分析し，生徒観察を行った結果，生徒理解が進み，生徒の実態を踏まえた授業に繋がったことが【成果①】で示した資料からうかがえる。また，生徒質問紙調査において「あなたをよくわかってくれる先生がいる」と肯定的に回答した生徒の割合が増加したことからも評価の実施は生徒理解に有効であったと考える。(図 28)

【図 28】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果④

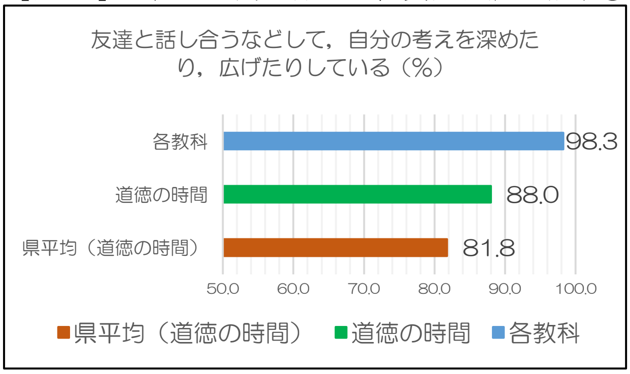


【課題】各教科と比べると「道徳の時間」では，考えを深め，広げることができていない

「授業では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしている」(全校平均98.3%)に対し，「『道徳の時間』では，友達と話し合うなどして，自分の考えを深めたり，広げたりしている」と肯定的に回答した生徒の割合は88.0%となった。県平均 (81.8%) は上回っている

ものの，この各教科とのギャップの理由を整理・分析し，改善を図る必要がある。(図 29)

【図 29】道徳の時間に係る生徒質問紙調査結果⑤



≪分析≫

中心発問までの授業展開であったり，考えを深めさせたり，広げさせるための手立て・発問の工夫に改善の余地があると考える。また，ペア学習で様々な考えや意見を出し合った後に行う全体交流の場にも改善が必要であると考える。生徒と指導者の１対１のやりとりに終始してしまうと，深まりや広がりが全体のものとならない。生徒から出た考えや意見を全体に返して練りあう中で考えをさらに深めたり，広げたりすることができるように授業改善を進めることが大切であると考える。

7　今後に向けて

中学校では，来年度から「特別の教科 道徳」が全面実施となる。前述の課題は学習指導要領が掲げる「考える道徳」「議論する道徳」に係る内容であり，改善に向けて重点的に取り組んでいきたい。

今後も継続的に授業改善を充実させ，生徒から出た意見を紡ぎながら，補助発問などを通してさらにもう一段深め，ねらいに迫っていく授業を目指していく。さらに，生徒が道徳的価値に対してより考えを深め，より自分を見つめ，授業を通して気づいたことや学んだことを生活に生かせるように授業を設計すること，カリキュラム・マネジメントをさらに充実させ,「生かす場面」を意図的につくっていくことが必要であると考える。

道徳科の評価については，本校で設定している「評価の視点」を生かしながら，継続的に生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り，励ます個人内評価へとつなげていきたい。その評価の妥当性・信頼性を担保するために今後も校内研修を重ねていく必要がある。また，評価を通知表の中にどのように位置付けるか，１・２・３学期の見取りをどのように活用して指導要録に反映させるかなど，来年度に向けて，研究を継続していく必要があると考える。

今後も「ふるさと」を基盤とし，主体的によりよく生きようとする力を道徳教育を中核に様々な場面を通して育んでいきたい。